平家物語（木曽の最期）　＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

今井四郎、木曽殿、主従二騎になつて①のたまひけるは、
「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」
今井四郎申しけるは、
「御身もいまだ疲れ[A]させ給はず。御馬も弱り[ア]候はず。何によつてか、一領の御着背長を重うはおぼしめし候ふべき。それは御方に御勢が候はば[B]ねば、臆病でこそさはおぼしめし[イ]候へ。兼平一人[ウ]候ふとも、余の武者千騎と②おぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢つかまつら[C]ん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」
とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出で来たり。
「君はあの松原へ入らせ給へ。兼平はこの敵防ぎ候はん。」
と申しければ、木曽殿のたまひけるは、
「義仲都にて③いかにもなるべかりつるが、これまで逃れ来るは、なんぢと一所で死なんと思ふためなり。ところどころで討たれんよりも、ひとところでこそ討ち死にをもせめ。」
とて、馬の鼻を並べて駆けんとし給へば、今井四郎馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、
「弓矢取りは、④年ごろ、日ごろいかなる高名候へども、最後のとき不覚しつれば、⑤長きずにて候ふなり。御身は疲れさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押し隔てられ、⑥言ふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて討たれさせ給ひなば、『さばかり日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、それがしが郎等の⑦討ち奉つたる。』なんど申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」
と申しければ、木曽、
「さらば。」
とて、粟津の松原へぞ駆け給ふ。

問一　二重傍線**ア**～**ウ**の読みをすべて現代仮名遣いの平仮名で書きなさい。

問二　波線**A**～**C**の助動詞の意味をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　使役　**イ**　打消　**ウ**　意志　**エ**　完了　**オ**　推量　**カ**　尊敬

問三　傍線①・②・④・⑥・⑦を現代語訳しなさい。

問四　傍線③「いかにもなる」とは、どのようになることか。五字以内で具体的に書きなさい。

問五　傍線⑤「長きずにて」の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　いつまでも不名誉な評判をたてられるということ
イ　実際は臆病な武士であったと敵に思われてしまうこと
ウ　家臣を見捨てた卑怯な大将だと決めつけられること
エ　それまでの高名が価値のないものになるということ
オ　郎等に討たれるほど弱いと世間に思われるということ

問四	問三		問二	問一
	⑥	①	A	ア
			B	
			C	
問五				
		②		イ
	⑦			
		④		ウ

学年
組
番号
氏名
得　点

平家物語（木曽の最期）　＊

〔出題の意図と留意点〕「候ふ」の活用形ごとの読みを覚える。基本的な助動詞の意味を覚える。重要語句の意味を理解する。古文に多用されるぼかした表現の内容を、文脈から読み取れるようにする。

☆解答例と配点

問一　ア　そうらわず　　イ　そうらえ　　ウ　そうろう　〈2点×3〉

問二　A　カ　　B　イ　　C　ウ　〈3点×3〉

問三　①　おっしゃったことには　　②　お思いください　　④長年
⑦　お討ち取り申し上げた　〈5点×5〉
⑥　取るに足りない人

問四　死ぬこと　〈5点〉

問五　ア　〈5点〉

計50点

平家物語（木曽の最期）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

木曽左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒締め、いかもの作りの大太刀はき、石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、重藤の弓持つて、聞こゆる木曽の鬼葦毛といふ馬の、きはめて太うたくましいに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙踏ん張り立ち上がり、大音声を上げて名乗りけるは、

「昔は聞きけんものを、木曽の冠者、今は見るらん、左馬頭兼伊予守朝日の将軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそ聞けA互ひによい敵ぞ。義仲討つて兵衛佐に見せよや。」

とて、をめいて駆く。一条次郎、

「ただ今名乗るは大将軍ぞ。あますな者ども、もらすな若党、討てや。」

とて、大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。木曽三百余騎、六千余騎が中をB縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行くほどに、土肥二郎実平、二千余騎で支へたり。それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。五騎がうちまで巴は討たれざりけり。木曽殿、

「おのれは、②疾う疾う、女なれば、③いづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、言はれんことも④しかるべからず。」

とのたまひけれども、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、

「あつぱれ、⑤よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」

とて、控へたるところに、武蔵の国に聞こえたる大力、恩田八郎師重、三十騎ばかりで出で来たり。巴、その中へ駆け入り、恩田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、ちつともはたらかさず、首ねぢ切つて、③捨ててんげり。その後、⑥物の具脱ぎ捨て、東国の方へ落ちぞ行く。手塚太郎討ち死にす。手塚別当落ちにけり。

問一　二重傍線ア～エの漢字の読みを現代仮名遣いで書きなさい。

問二　点線1～3の音便形をもとの形に直しなさい。

問三　□部a～eの助動詞の意味を答えなさい。

問四　傍線①～⑥の語句の意味を書きなさい。

問五　波線Aはどのような意味か。分かりやすく説明しなさい。

問六　波線Bはどのような様子か。分かりやすく説明しなさい。

問七　義仲が女の巴を戦に連れて行ったわけが最もよく分かる一文の、最初の五字を書きなさい。

問七	問六	問五	問四			問三	問二	問一
			⑤	③	①	a	1	ア
						b		
								イ
							2	
						c		
			⑥	④	②	d		ウ
							3	
						e		
								エ

学年
組
番号
氏名
得点

平家物語（木曽の最期）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　軍記物によく見られる、装束や物の具などの名前を正しく読めるようにする。助詞・助動詞の意味を文章のつながりの中でとらえ、現代語訳に反映させる練習を繰り返したい。動きの多い合戦場面を映像的にイメージできるように内容を把握させたい。

☆解答例と配点

問一　**ア**　ひたたれ　**イ**　かぶと　**ウ**　だいおんじょう　**エ**　かじゃ　〈1点×4〉

問二　**1**　太く　**2**　奉りて　**3**　捨ててけり　〈2点×3〉

問三　**a**　断定　**b**　尊敬　**c**　打消　**d**　受身　**e**　意志　〈2点×5〉

問四　①　うわさに聞いただろうが　②　早く早く　③　どこへでも行け　④　あってはならない　⑤　よい相手が欲しいなあ　⑥　鎧甲　〈3点×6〉

問五　互いに実力、身分ともに戦うのにふさわしい相手という意味。　〈4点〉

問六　少人数の木曽軍が大群の敵を相手に縦横無尽に駆け回って戦う様子。　〈4点〉

問七　巴その中に　〈4点〉

計50点

平家物語（木曽の最期）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

木曽殿はただ一騎、粟津の松原へ駆け給ふが、正月二十一日、①入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をざつとうち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども（ア）はたらかず。今井が行方のおぼつかなさに、②（イ）振り仰ぎ給へる内甲を、三浦の石田次郎為久、追つかかつて（A）よつぴいてひやうふつと射る。痛手なれば、真向を馬の頭に当てて、うつぶし給へるところに、石田が郎等二人落ち合うて、つひに木曽殿の首をば（B）取つてんげり。太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声を上げて、

「この日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、三浦の石田次郎為久が（ウ）討ち奉つたるぞや。」

と名乗りければ、今井四郎いくさしけるが、これを聞き、

「③今は誰をかばはんとてか、いくさをもすべき。これを（エ）見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本。」

とて、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ（オ）失せにける。さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

問一　傍線①・②の語句の意味を書きなさい。

問二　二重傍線ア・イ・オの主語を本文中の語で書きなさい。

問三　二重傍線ウ・エの敬語の、(1)敬語の種類と、(2)敬意の相手を書きなさい。

問四　本文中から擬音語を抜き出して書きなさい。

問五　波線A・Bは音便形である。もとの形を書きなさい。

問六　木曽殿が深田に気付かなかった理由を説明しなさい。

問七　傍線③「今は誰をかばはんとてか、いくさをもすべき」とあるが、ここで、今井四郎が言いたいことを具体的に書きなさい。

学年		組		番号		氏名		得点

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
①	ア	ウ		A		
		(1)				
	イ	(2)				
②				B		
	オ	エ				
		(1)				
		(2)				

平家物語（木曽の最期）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　古文の基本語句の意味を覚えるとともに、主語と敬語の用法を理解することで、人物の言動を把握し、話の展開を正確に読み取る。語り物に多く見られる音便について理解する。

☆解答例と配点

問一　①　日暮れ時　②　気がかりで　〈3点×2〉

問二　**ア**　馬　**イ**　木曽殿　**オ**　今井四郎　〈3点×3〉

問三　**ウ**　(1)　謙譲語　(2)　木曽殿　**エ**　(1)　尊敬語　(2)　東国の殿ばら　（完全答）〈4点×2〉

問四　ひやうふつ　〈5点〉

問五　**A**　よくひきて　**B**　取りてけり　〈3点×2〉

問六　夕暮れであたりが薄暗かった上に、薄氷が張って深田がよく見えなかったから。　〈8点〉

問七　主君である木曽殿が討たれてしまったので、戦う意味がなくなったということ。　〈8点〉

計50点

平家物語（木曽の最期）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

今井四郎、木曽殿、主従二騎になつてのたまひけるは、
「①日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」
今井四郎申しけるは、
「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。何によつてか、一領の御着背長を重うはアおぼしめし候ふべき。それは御方に御勢が候はねば、臆病でこそさはおぼしめし候へ。兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢ウつかまつらん。あれに見え候ふ、粟津の松原と申す。あの松の中で御自害候へ。」
とて、打つて行くほどに、また新手の武者五十騎ばかり出で来たり。
「君はあの松原へ入らせ給へ。兼平はこの敵防ぎ候はん。」
と申しければ、木曽殿のたまひけるは、
「義仲都にていかにもなるAべかりBつるが、これまで逃れ来るは、なんぢと一所で死なんと思ふためなり。ところどころで討たれんよりも、ひとところでこそ討ち死にをもせめC。」
とて、馬の鼻を並べて駆けんとし給へば、今井四郎馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて申しけるは、
「弓矢取りは、年ごろ、日ごろいかなる高名候へども、最後のとき②不覚しつれば、長きずにて候ふなり。御身は疲れDさせ給ひて候ふ。続く勢は候はず。敵に押し隔てられE、③言ふかひなき人の郎等に組み落とされさせ給ひて討たれさせ給ひなば、④聞こえさせ給ひつる木曽殿をばI、それがしが郎等の討ち奉つたる。』なんど申さんことこそ口惜しう候へ。ただあの松原へ入らせ給へ。」
と申しければII、木曽、
「さらば。」
とて、粟津の松原へぞ駆け給ふ。

問一　二重傍線**ア〜ウ**の敬語の種類を書きなさい。

問二　波線**A〜E**の助動詞の、(1)基本形と、(2)意味を書きなさい。

問三　点線**I・II**の「ば」の違いを文法的に説明しなさい。

問四　傍線①「日ごろは何ともおぼえぬ……重うなつたるぞや。」とあるが、木曽殿がこのように言ったのはどのような気持ちからか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　たび重なる激しい戦いに疲れ果てて、もうこれ以上戦いたくなかった。
イ　長い間の戦のためずっと鎧を着続けていたので、脱いで身軽になりたかった。
ウ　部下がいなくなって、もう戦いに勝つ見込みがなくなり、がっかりしていた。
エ　一番信頼する今井四郎と二人だけになったので、緊張がとけて弱気になった。
オ　いつも身に着けて体の一部のようになった鎧を脱ぎ、いさぎよく自害したかった。

問五　傍線②「不覚しつれば」とは、具体的にどのようになったらということか。本文中から抜き出し、初めと終わりの五字で答えなさい。

問六　傍線③・④を現代語訳しなさい。

問七　(1)今井四郎と、(2)木曽殿が、この場面で互いに望んでいることは何か。それぞれ簡潔に書きなさい。

問七		問六		問五	問四	問三	問二			問一
（2）	（1）	④	③			Ⅰ	E	C	A	ア
							(1)	(1)	(1)	
										イ
							（2）	（2）	（2）	
				〳						ウ
						Ⅱ		D	B	
								(1)	（1）	
							（2）	（2）		

学 年
組
番 号
氏 名
得 点

平家物語（木曽の最期）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　敬語の用法を理解する。文脈の中の助動詞の意味を正しく把握する。登場人物の心情を読み取る。

☆解答例と配点

問一　ア　尊敬語　イ　丁寧語　ウ　謙譲語　〈2点×3〉

問二　A　(1)　べし　(2)　当然　B　(1)　つ　(2)　完了　C　(1)　む　(2)　意志　D　(1)　さす　(2)　尊敬
E　(1)　らる　(2)　受身　（完全答）〈3点×5〉

問三　Ⅰ　係助詞「は」が濁音化したもの　Ⅱ　確定条件の接続助詞　〈3点×2〉

問四　エ　〈3点〉

問五　言ふかひなく～せ給ひなば　〈4点〉

問六　③　取るに足りない人　④　有名でいらっしゃった　〈3点×2〉

問七　(1)　木曽殿に名誉を守って自害してほしい。　(2)　今井四郎と一緒に討ち死にしたい。　〈5点×2〉

計50点